

研究図書館が置かれている環境の分析 <抜粋>

(2009年2月 ARL (北米研究図書館協会) 調査報告)

研究、教育、学習における図書館の役割の動向

研究図書館がこの先5年間、有効に機能していくためには、多くの要因を考える必要がある。Web 2.0の拡大、研究重視型カリキュラムの採用による学部学生教育の変化、eリサーチへの急激なシフト、さまざまな資料形態の必要性、電子化の推進による紙媒体蔵書スペースの削減、図書館蔵書の再定義、大規模かつ共通の問題を支援するためのライブラリアンとスタッフの役割の再定義、利用者の行動と期待の変化、評価の重要性の増大などである。

以下に、研究図書館の戦略的役割を考える上で必要と思われる、傾向と論点をあげる。

1. 研究実践の根本的な変化により、図書館は新しい仕事と支援の仕方を構築する必要が生じるであろう。これは、以下の理由による。

○教員と大学院生の研究行動から、図書館は、研究方法論の面において、例えば、情報の同定や分析、組織化、あるいは馴染みのない研究領域の文献について内容を把握すること、などの有用な支援を行うことができることが示唆される。このような支援は、IT、カリキュラム委員会、教育技術者、研究所、センター、その他の機関との新たなパートナーシップを生むだろう。

○学際的領域の学生が増え、主要な位置を占めつつある。外国語や主題専門知識は、学部図書館において相変わらず重要である一方、それぞれの専門の枠組みを超えて、学際的な新たな研究手法に対応した支援が求められている。これからは多才なスタッフがチームを組んで支援することが必要になるかも知れない。

○主題専門知識や情報資源(資料)、新しい形態の出版物、データマイニング技術、技術的知識などを組み合わせて調査研究活動を行う、学際領域のデータセンターや同様の目的をもったeリサーチ事業などを支援する必要がある。ここでは、専門的な図書館スタッフ、専門知識、そして基盤の不足が課題となる。研究機関間、あるいは国家的・国際的研究プロジェクトの支援を目的とする場合、問題はより複雑になる。キャンパスの環境や新しい形の支援への取り組みの度合いにより、選択肢は変わってくる。

○革新的な連携や新たなパートナーシップは、資源が少なくなる中でより重要性を増すだろう。新たなサービスや資源を作り出す際には、組織内、あるいは組織間で最上のパートナーを見つけることが、経済的制約を少しでも軽減し、革新し前進する手助けとなる。

2. 研究図書館の蔵書・蔵書構築は新しい意味を持つことになる。

○特殊コレクションは、大規模な研究図書館の特徴であり、大学院生や教員の教育・研究にとってほかにはない価値を提供している。既存の資料や新規の資料について、収集や保存、記録に力を注ぐよう、注意して行かなければならない。

○特定領域のコレクション構築において、特に外国語資料や諸外国から広範に収集しているような場合は、短期的な財政難や財政緊縮が、収集への障害となることがある。このような場合も、包括的な外国語コレクションを構築することの戦略的意味に配慮すべきである。

研究図書館が置かれている環境の分析 <抜粋>

(2009年2月 ARL (北米研究図書館協会) 調査報告)

○“Web上の情報の収集”、特にデータベースサイトについてはデータそのものの収集について、興味・関心が高まっている。Web上の情報の収集に関する包括的戦略をうまく策定できないと、将来の世代の研究者にとって重要な文化的・学術的コンテンツを失うという危険が生じる。

○Googleと著者間の調停は、研究図書館が、教育・学習における課題や研究方法論における支援方法を修正するのに役立つかもしれない。スペース問題の解決にも関係するだろう。

3. 研究図書館は、学生、教員、研究者の活動の場であるネットワーク環境へ、より多くのサービスと資源を配置することになるだろう。

○Web 2.0により、ユーザーとアプリケーション開発者のWeb上での相互作用が生まれ、コミュニケーションと創造、連携が促進され、Web上のコミュニティを育成することで情報共有が積極的に行われている。学生は第一の推進力であり、今は学部学生であっても将来は大学院生となるかも知れないため、図書館は、学生の情報消費行動と学習習慣への対応が必要になるだろう。包括的で関係性があり、発展的かつ魅力的なネットワーク上の世界にうまく対応できないと、消費者(利用者)と疎遠になる恐れがある。

○WiFiやその他のモバイル通信機器、スマートフォンなどが広く普及したことで、モバイル機器やそのユーザー向けの図書館サービスを一新する動きに拍車がかかるだろう。図書館はコンテンツやツール、その他のサービスの提供において革新的でなければいけない。

○コースマネジメントシステムは、情報資源やチュートリアル、各種連絡、あるいは様々な図書館資源を配信するための理論的な結び目として機能し、これらの資源を目立たせるだろう。適切かつ適時で、学生の課題に沿った、学習成果に対して補完的な役割を果たすようなコンテンツが、図書館サービスの標準となるだろう。成功するには、教員との連携が不可欠である。

4. 教育の“アクティブで、参加型の学習”への変化を受けて、学生の学習や研究、生産性向上を支援するために、図書館がどのように教員と連携していくかも変化していくだろう。

○情報リテラシー教育を基礎コースやさまざまなカリキュラムに組み込む動きは、より拡大するだろう。これは、図書館がカリキュラム開発に貢献し、研究方法を支援する機会、図書館資源とサービスを売り込むチャンスを生み出すことになる。

○情報リテラシーへの関わりにおいて、図書館スタッフは、教室や講義室で学生と顔を合わせて指導するよりも、学習教材やチュートリアル、ビデオ、その他マルチメディアによる教材の作成や非同期型教育により時間を費やしているという例もある。学習成果にも心配りすることや採点、教員とともに教える、といったことも期待されている。

○学部学生の教育が、アクティブで体験的な学習・研究という形にシフトしている。図書館はこの新しい教育形態を支援するため、特殊コレクション内の一次資料や、機関リポジトリ内のデジタル資料、各種データを、より精力的に活用することになるだろう。これを達成するには、特殊コレクション部門・指導部門の図書館スタッフは、デジタル資料へのアクセスを促進するだけでなく、授業内容についてのマーケティングを強化していく必要がある。

研究図書館が置かれている環境の分析 <抜粋>

(2009年2月 ARL (北米研究図書館協会) 調査報告)

5. 図書館は、図書館の概念に新たな息を吹き込むために、非典型的な学生とも関係することになるだろう。

○遠隔教育学生数の回復、留学人気の高まり、入学者数や研究企業増加を目的とした政府資本の注入の可能性などに対して、効果的な行動をとる必要がある。

○専門的なプログラムが増えている。このようなプログラムに参加する学生は、図書館Webページのデザインやコンテンツを違った観点で捉えることで、新たな利益を引き出すだろう。技術が重視され、図書館の役割の一つとして、ソフトウェアやアプリケーションのトレーニングの提供が求められる可能性がある。

6. 大学の財政事情が厳しいため、図書館の建設計画や新たな構想は、多くが削減、延期されるだろう。投資に見合った成果が得られているか、監査が頻繁に行われ圧力がかかり、図書館の根本的な組織改革を促すだろう。

○研究図書館が、研究生産性向上と教育という流行のテーマを追求するという、例外的な展開も見られる。調査によると、図書館は、キャンパスにおける主要な学習スペースを提供するのが当然であると見られている。学部学生のためのラーニング commons は、多くのキャンパスで成功例となっている。また、教員や大学院生は、図書館が物理的な環境を整えることで、研究・思考活動への要求に応えるべきであると、期待をこめて語っているが、このような期待にどう応えるべきか、意見の一致は見られていない。

○分館は、スペースの大部分あるいは全部を手放し、所属学部に提供すべきである、との期待もある。このような縮小策を予期して、あるいは自ら提案して、ネットワーク上のサービスや資料、教育プログラムの提供という形で対応する図書館や分館もあるかもしれない。あるいは分館スタッフは、新たな重要な領域に配置されるかも知れない。結果として、分館縮小は新しい構想を助力する者と見なされることになるだろう。

○中央図書館の建物については、新しいテナントやサービスを受け入れるよう、圧力が強まるかも知れない(スペース紛争)。もし、図書館のサービスを補完するようなテナントとパートナーシップを結んだときは、図書館は、研究・教育・学習を支援する能力があることを示すための戦略をもつ必要に迫られるだろう。何もプランがなければ、スペースが没収される恐れもある。

○図書館施設を保持するためのもっとも強力な論拠は、データに基づくものとなるだろう。これは、利用者の要求の評価と、図書館内空間において利用者が受けている利益についての定性的・定量的な証拠とがある。

○スタッフの適応能力も、将来の成功を育むのに必要である。さまざまな技能を持ったスタッフを雇用すること、新たに出現する学術・研究・教育実践に応じて業務とサービスを再編すること、そして、経験し、革新し、リスクを負う姿勢を持つことが要求される。

(原題:

Transformational Times:

An Environmental Scan Prepared for the

ARL Strategic Plan Review Task Force

February 2009)